

えられた。三田は自分が関わった一人一人の幸せのために、苦勞をいとわず働き続け、昭和三十六年病に倒れ、四十九歳で逝った。

終戦から、もう半世紀以上が経とうとしている。戦争を知らない人々が、七〇%を超したと言われている。だからこそ、戦争の実体がどういうものであるかということを知らない若者たちに伝えるのは、身をもって体験した私どもの使命だと考えて、筆を執った。

## はるかなる承徳

福島県 藤原礼壽

### 一 承徳での出来事

「だれかっ！」突然に、鋭く短い声はまだ明け切らぬ朝もやの中から響いてきて、銃を構えた兵士が追ってきた。銃口には着剣をしているのでびっくりしたが、すかさず「日本人だっ！」と、大声でどなった。

当時、旧制中学の学科に軍事教練があったので、多少このような事態での対応についての知識は持っていたため、それが歩哨であることと、ぼやぼやしていたら危ないということを、とっさに判断したからだった。

この道は、街の中心街を走る南營子大街ナンエイシノオウガイから忠靈塔へ通ずる割合に広い道で、その日も忠靈塔へ参拝するために、早起きをして一人で出掛けてきたところだった。しかし、いまだかつてこの道でこんな目に遭ったことは、一度もなかった。そこから右手に、しばらくは陸軍の将校用の官舎が続いている。「訓練なのか？ 人騒がせなことをするものだ！」と、ちょっと腹を立てたが、そのときにはそれ以上はあまり深く考えなかった。そして忠靈塔から帰りの道には、もうどこにも歩哨の姿は見えなかった。しかし、それから十日後には、ソ連軍が満州に突然侵攻してきたのである。「あの時、すでに陸軍官舎はもぬけの殻だったのでなかったか？」と、今でも思っている。関東軍の西南部防衛司令部があった満州国熱河省の省都、承徳という街での終戦直前の出来事であった。

終戦時に、我が家が承德にあったいきさつは、次のようなことからである。父は私が二歳のときに、東京の警視庁から関東州の大連市の水上警察署に転勤になって、更に満州事変後には、満州国吉林市の警察署に異動になった。私はそこで、明治三十九（一九〇六）年に設立された南満州鉄道株式会社（通称満鉄といわれていた）が経営する、吉林陽明小学校に入学した。ようやく小学校生活にも慣れた一年生の二学期には、父が今度は承德に転勤することになり、家族全員で承德に移住した。当時の承德は、まだ在留邦人の数が少なかったので、小学校は原住民の屋敷を改造した施設で、一年生と二年生とが同じ教室で勉強していた。翌年には赤レンガ造りの二階建てのスチーム暖房の付いた新校舎ができあがり、私たちもそこに移動した。一つ年下だった妹の礼子は、新しい校舎の最初の一年生として入学してきた。そのことから、承德市街にも急に在留日本人が増え始めてきたので、小学生も多くなり一年生二クラスのところもあるようになっていた。

昭和十二（一九三七）年七月、支那事変が勃発したときには、多数の日本軍が承德経由して、北支那方面に進駐していった。次から次へとやってくる日本軍のための宿舎が足りなくなり、警察官舎の住人は、強制的に軍に部屋の一部を提供させられた。空き地には戦車が置いてあったので、そこは男の子たちの絶好の遊び場となっていた。

間もなく、かつては関東軍が警備を担当していた満ソ国境地帯の警備は、警察が担当することとなり、国境周辺にも警察隊が駐屯するようになり、父も承德県小白旗という部落の長として赴任した。そして、そこが父の最期の地となってしまった。

昭和十三年九月十二日、当時盛んに国境付近に出没していた共産八路軍の奇襲を受け、その戦闘で敵弾に当たり戦死したのであった。私が小学校三年生の時のことである。なんでも、父の階級の者が殉職したのは、満州国建国以来初めてのことだそうで、承德にあった元清の皇帝の離宮の中の「楠殿ツクスギノミヤ」で、警察葬として盛大な葬儀が執り行われ、その後には霊塔にも

合祀された。漆黒の夜に赤々と映える「かがり火」の中を、多くの軍人、警察官たちに見守られながら、白い布で警友の胸に抱かれた父の遺骨が、静かに忠霊塔の中に吸い込まれて行った光景は、今も目の中に焼き付いていて忘れることができない。父の殉職後、母は承徳で産院を開業したが、入院の設備があったので、奥地から警察や軍関係の車で早めにきて、長期入院する人が多く、忙しい日々となった。

そのような生活を過ごしながら、私たち兄妹は承徳の在満国民学校を卒業した。多くの友達は、それぞれの父親の転勤などに伴って転校を余儀なくされていたので、深く交わりのあった友人は少なかった。そして、私は関東州の旅順にあった伝統のある旅順中学校に、妹は同じく旅順高等女学校に進学して、それぞれの学校の寮に寄宿していた。

たまたま三年生の三学期になって、私はツベルクリン反応が陽性転化したことが分かり、養生のために休学を強いられて承徳の家に帰っていたのである。そして学校に戻ることになり、その前日の朝、忠霊塔の父

にお別れのために参拝に行つて、前途の事件に遭遇したのだった。

## 二 復学で旅順へ

昭和二十年七月の末ごろ、どういふわけか分からないが、むしうに学校に戻りたくなくて、医者からはまだ駄目だと言われているのを無理に押し切つて、学校に戻ることとした。後から考えると虫が知らせたのもいふのであろうか、結果的には妹を迎えに行つたことになったのだった。

母はもともと病弱な方で、その当ても病気で療養中であつたが、私のことが心配だと言つて旅順まで私を送つて来てくれた。承徳から旅順までは、当時汽車で二日ほどかかつていた。承徳を朝出発して、夜中に錦州という駅に着き、ここで蒸気機関車に水と石炭を補充するため約三十分ぐらい停車する。真夏のことでは車内は蒸暑かつたから、母と二人でホームに涼みに出た。そのとき、反対側の引き込み線に、有蓋の貨物列車が止まつていて、何やら人の気配が暗やみの中から感じられた。何だろうと夜目に透かして見ると、その

貨物列車に乗っているのは、大勢の関東軍の兵士で

あった。先頭も最後尾も分らないぐらい長い連結車両だったので、乗っている兵士は相当な人数だったと思う。時折、前の車両から後ろの車両へ、後ろの車両から前の車両へと伝令のような人々が動いていた。

「大変な数の兵隊さんだよ。どこに行くのだろうね！」と母に言ったら、「しっ！ そっちの方を見なさんな！」と小声でたしなめられた。そして母は、少し回りの様子をうかがってから、「どこで憲兵が見ているか分からないのだから！」と言っていた。早々に私たちは列車の中に戻って、そのことは口にしないことにした。

旅順中学校では、友達は皆学徒勤労動員で出ていてほとんど不在で、寄宿舎に十人ほどの生徒しか残っていなかった。早速、私も旅順工科大学の図書室に動員学生として行くように言われ、寄宿舎から通うことになった。学徒出陣で入隊する学生が、借りていた図書室の本を返納して行くので、廊下には本が山のように置かれていた。それを所定の本棚に整理する仕事で

あった。

母は三日ばかり旅順で泊まって、私の寄宿舎での生活ぶりなどを見届けてから、承德に帰って行った。これが母との永遠の別れになろうとは、夢にも思わないことであつた。母が承德に帰った直後に、ソ連軍が不法にも国境を突破して怒濤の如く侵攻してきたのである。あと四、五日旅順にいたら、親子三人そろって引き揚げて来れたかもしれない。運命のいたずらとはいえ、悔やんでも悔やみきれないものである。

### 三 敗戦を知る

旅順工科大学に動員で通い始めてまだ幾日もたたない日に、広島に新型爆弾が投下され市内は壊滅状態となったことを、大学の図書室の新聞で知った。後日、その新型爆弾は原子爆弾であることが分かった。原子爆弾については、降伏前のドイツが開発中であつたことや、その威力についてもおおよそのことは知っていた。しかし、そんなことに一喜一憂している余裕はなかった。その一両日後にソ連が参戦してきたからだ。「大変なことになったぞ！ 日本は大丈夫だろうか？」

と、はじめて我が身にも危機を感じた。「特攻」「玉砕」という言葉が頭をかすめた。戦況がどうなっているのか、新聞を見てもさっぱり分からない。むせ返るような暑い日が続き、木立の中では蟬がたくさん鳴いていた。それを静かに聞いていると、人間社会のひっ迫感がうそのようで、平和で自由な営みがうらやましくなってきた。

「蟬の声 皇国のいくさ また険し」。思わず口をついて出た一句だった。

広島に続いて長崎にも原子爆弾が落とされ、そして重大ニュースが八月十五日の正午にあると聞かされた。十五日、その日も相変わらず暑い日だった。正午前、その日入隊する学生たちが、大勢大学の玄関前の広場に並んでいた。図書室で本を整理していたら、学内のスピーカーにラジオの放送が流れてきた。雑音が激しくて何を言っているのか、さっぱり分からない。急いで階段を駆け下りて玄関に出てみたら、集まっていた学生たちが皆泣いている。「どうしたんですか?」と近くの学生に尋ねると、「日本が降伏した。戦争に

負けたんだ!」と言って、目にいっぱい涙をためていた。思いもかけない言葉だったので、一瞬心の整理がつかなかったが、やがて「助かった、もう特攻も玉砕もない!」という感動がこつ然と湧いてきた。そしてその反動の如くに、全身の力が抜け落ちてしまうような気持ちになってきた。

#### 四 承徳へ帰ろう

八月十五日、玉音放送が終わったらすぐに、承徳の家に戻ることを決心した。「承徳へ帰らねば!」と思うのだが、ソ連軍の侵攻の状況も、途中の治安がどうなっているのかも分からず、時間がたつに連れて決心も鈍ってきた。そこへ、「日本は降伏しても、関東軍は戦い続ける」といううわさが流れたりした。今後どうなるのか、どうすべきなのか、皆見当がつかなくなった。そこで、三年生まで担任だった柔道教官の吉田三郎先生の家を訪ねて相談した。先生は「行けるところまで行って、駄目だったら戻って来い」と言われたい。そこで翌朝、旅順を一番の汽車でたつて、承徳に向かう決心を固めた。妹も一緒に連れて帰るために、

旅順高女の寄宿舎を訪ね、妹にこれからのことを話して、明朝旅順駅で落ち合うこととした。そして、そのことを舎監に話したところ、舎監から「承德方面から来ている他の女生徒たちも、一緒に連れて行ってくれないか」と頼まれたが、「この先、どうなるのかわからないのに、よそのお嬢さんたちを連れて行くわけにはいかない」と事情を説明してお断りした。夜までには、旅中の寄宿舎生もあらかた動員先から戻って来た。承德から来ていた下級生の二人も、一緒に行動することになった。身の回りの物を詰めた背囊はいのうと、家から仕送りされていたわずかばかりのお金だけを持って、翌朝、予定通り旅順をたつた。途中の大連から、承德の手前の葉柏寿へ帰るといふ中学生が一人、私たちの一行に加わった。

列車は、何事もなかったかのように満州の広野をひた走りに走っていたが、乗り換え駅の奉天（瀋陽）が近づいてきたころ、急に銃声が聞こえ出した。「どきっ」としたが、それでも列車は止まることなく奉天駅に滑り込んだ。いそいで承德方面行きのホームへ

走ったが、そこに止まっていたのは有蓋の貨物列車で、苦力風クワリの人たちがぎゅうぎゅう詰めになって乗っていて床に腰を下ろしていた。葉柏寿に帰る中学生は、その中に無理矢理乗り込んだが、妹を連れてくる私たちはそこに割り込むわけにはいかなかった。

私たちは、ひと汽車待つことにして駅の外に出てみた。そして驚いたことに、日本刀を抜き身で持ち歩いている人たちがいた。かと思うと、日本の兵士が銃剣風に塗装した木製の銃剣代用品を腰に下げている。一見してそれと分かるお粗末なものだった。銃は持っていないので、これでは最初から戦いにならないと思った。駅に戻ってみたら、もうどこにも列車は出ないと言う。戻ることも進むこともできなくなってしまったのだ。

##### 五 ソ連軍の進駐

奉天駅の近くの小学校に、満蒙の奥地から逃げ延びてきた避難民が来ていると聞いたので、「もしかしたら承德の人たちもいるのではないか?」と思って行ってみた。ほとんどの人が、着の身着のままの女・子供

たちで、体を横にして休む余地もないくらいに詰め込まれていた。避難行の様子を聞いてみたら、全員、北満から逃げてきた人たちで、承徳の人はいないと言う。「早く出発した人たちは、もう既に朝鮮まで行っているはずと思う」と教えてくれた。すると、私たちは全く逆の方向にきていることになる。そろそろ、日が西に傾きかけてきたので、ねぐらを探さねばならぬと考えて通りを歩いていたら、映画館があった。中をのぞいて見たら、そこにも大勢の避難民がいたが、二階席が空いていたので、そこで泊まることにした。こうして奉天での第一夜は、何とか雨露をしのぐことができた。

翌朝、すぐ近くで重量感のある騒音がしたので表に出て見た。ソ連軍の戦車部隊が進駐してきたのである。映画館のすぐ脇の大通りを何台も列をなして通って行ったが、一台で交差点を塞ぐくらいのも、けた外れに大きい戦車だ。砲身も驚くほど長く、キャタピラーの前端より相当前に突き出ている。まるで動く砲台のように思えた。日本軍の戦車とは段違いだった。沿道

では、満人たちが大勢でソ連の小旗を振って迎えに出ていた。いつの間にあんなに大量のソ連国旗の小旗を作ったのだろうかと驚いたが、全部精巧にできた印刷物であった。歴史的に戦乱に慣れた民族とはいえ、その変わり身の素早さには驚かされた。

夜になって暴動が発生した。大勢の人の足音と、怒号や悲鳴、それに加えて物の壊れるような「がちゃ、がちゃ、がっちゃん！」という音が、すぐ前の通りを繰り返し繰り返し通り過ぎて行く。ここには入ってこないようにと、祈るような気持ちになって息をひそめていたが、その夜はせっかく雨露をしのげるところを確保するのに、なかなか眠ることができなかった。

翌早朝、外に出てみたら、そばの歩道に人があおむけに倒れていて、目は開いたままでまばたきひとつしない。まだかすかに息をしていて死にきれていない様子だった。服装から見ると、日本人か朝鮮人であろう。通りの左右にも、幾つもの死体が転がっていたが、だれも片付けようとしないうし、片付ける道具もなかった。死体の上に掛けるむしろ一枚さえなかった。

真夏のことだったので、昼ごろになってくると死体は薄黒く変色して、死臭が漂い始めた。

その晩から、男性が交替で不寝番に立つことになった。避難民の中には、召集解除になった在郷軍人の人たちがいたし、その人たちのうちには、まだ拳銃を隠し持っている人もいたので心強かったが、それでも皆は戦々恐々とした日々を過ごしていた。表通りの出入り口には「かんぬき」を掛けて、昼間も裏木戸から路地を通って出入りするようになった。日本人がいることに気付かれないようにするためだったが、幸いに襲われることなく過ごすことができた。

数日後、突然に館内で銃声が響いて、天井から「ばら、ばら」と板や壁の破片が落ちてきた。ソ連兵が入って来て、威嚇射撃をしたのだ。「手を挙げる！」と一階の方でだれかが怒鳴ったが、今までに両手を挙げることなどはなかったから、その屈辱感には耐えがたいものがあった。私たちのところにきたのは、背の低い少年兵のような者と、二人のソ連兵だった。少年兵のような者が、避難民の一人一人の脇腹に大型の拳

銃を押しつけると、他の二人が体を触って隠している物がないかと調べたり、荷物を開けて中を調べたりした。腕時計をみつけると必ず持つて行った。拳銃を押しつけられたときには、「何くそ、おれは日本男子だ！」と、心では思うのだが、体ではひびが震えて止まらなかった。一年生の三原晃一君が拳銃で頭を殴られたが、大したけがでなくて良かった。帽子をかぶったままだったのが、ソ連兵の怒りをさそったらしく、その中に武器を隠していると思われたようだった。だが、そんな教育は受けたこともないから分かるはずがなかった。ともかくも、妹のところを無事に通り過ぎてくれたので、ほっと安心した。今まで張りつめていた気持ちが急に緩んで、どっと疲れが出たことを覚えている。

その後、ソ連兵による婦女子への凌辱事件が多発しているというわさが伝わってきて、ほとんどの女性は頭を坊主狩りにして、服装も男物を着るようになった。妹も日本兵から小さめの軍服をもらって着て、頭を丸坊主にした。妹は体格が良い方だったので、軍服



を着ても何とかかっころはとれたが、刈ったばかりの頭は地肌が白くて、帽子を目深にかぶって頭を隠すしか方法がなかった。

#### 六 錦州へ

九月に入ったので、朝晩の冷え込みが厳しくなってきた。奉天での冬の寒さはまた格別だったことを経験していたので、これから先のことか思いやられた。食事も最初のころはにぎり飯だったが、そのうち一日にジャガイモ二個になってしまった。そんなころ在郷軍人のグループに、錦州行き列車が出るという情報が入った。同行の下級生二人は行かないと言ったが、私と妹は乗車グループに入れてもらうことにした。少しでも承徳に近付きたかったのと、奉天より錦州の方が冬期を過ごしやすいと考えたからだ。

出発当日は、八列縦隊で奉天駅に向かった。女性はいない。妹一人であったので、縦隊の真ん中に入れてもらって、ソ連兵などに気付かれぬようにしてくれた。駅のホームに通ずる地下道までは順調にいったが、地下道の中で行進が止まってしまった。ホームで、暴徒

が、縦隊の出てくるのを待ち構えているということだった。しばらく立ち往生していたが、「一、二の三」という合図で一度に飛び出すことになった。乗車する列車は、ホームの右側に止まっているということだ。

階段を駆け上がったところに、二つの乗車口が開いていた。車両の右側の取っ手に手をかけたとたん後ろから背嚢をむんずとつかまれたが、とっさに肩から背嚢を外して、車内に飛び込んだ。危機一髪のこと、まったく危なかった。暴徒は、車内まで追ってこなかったが、その車両には十人足らずしか乗っていなかった。ほっとして周りを見回した。妹がいない。どうしたのか心配になったが、外を見ようと思っても、危なくてデッキには近付けない。そのうちに、ソ連兵が一人やってきてジェスチャーで腕時計を出せと言っている。すでに腕には時計をいっばいまいていた。だけれども、腕時計はとっくに取られてしまっていて、持っているはずがない。こちらにもジェスチャーで、「腕時計はない！」と言ったら、ソ連兵は突然に興奮してやにわに手榴弾を取り出し、デッキの出入り口の

ところへ投げる動作をした。「腕時計を出さなければ投げるぞ！」という脅しである。一瞬、恐怖心に襲われたが、落ち着いてソ連兵の持っている手榴弾をよく見ると、日本軍の手榴弾であった。私はその扱い方については教練で習っていたので、ピンを抜いてから三つ数えて投げないとすぐには破裂しないということを知っていた。幸いに窓は開いていたし、至近距離だったので、こっちに投げたらすぐに拾って窓の外へ投げ捨てようと身構えていた。ソ連兵はしばらく脅しを続けていたが、無いものは出るはずもない。そのうちに、あきらめて引き揚げてしまった。列車は予定の時刻を一時間以上も遅れて、やっと動き出した。と同時に、隣の車両からこちらの車両に向かって大勢の人が移ってきた。その中に妹もいた。隣の車両はぎゅうぎゅう詰めで、体を動かす余裕もなかったそうだ。妹は、腰掛けの下にかくまってもらっていたと言った。

列車は途中の駅にはほとんど止まることなく走りつづけた。私たちは、錦州に回送される列車に、たまたま運良く乗ることができたのであって、鉄道はソ連軍

が接收していたから、乗車券も乗車賃もいらなかった。

#### 七 承德の人々

その日の夕方に、どうにか錦州に着いた。取りあえず、駅の近くにあった小学校に行くことになった。学校の中に入ってみたら、図らずもそこには承德からきた人たちが大勢避難していた。奉天に残った下級生の親たちも、みんなそこに避難していた。強引にでも彼らを連れて来るんだったと後悔した。

母を尋ね歩いたが、だれも見掛けなかったと言うのみであった。「一体、どこに避難したのだろうか?」「一足先に旅順に行ってしまったのではあるまいか?」などと考えたが、不安な心は募るばかりだった。その夜はそこに泊まって、翌日日本人居留会に行ってみた。何か分かるかもしれないと、一るの望みを持って訪れたが、しかし無駄だった。

居留会の建物の二階にも避難民がいたので、その日からはそこに厄介になることになった。お昼には「水閉」<sup>ケイト</sup>がバケツで運ばれてきて、一杯ずつ配られた。

奉天を出発した日以来、まだ何も食べていなかったし、そのうえ味のついたものなどにはひと月近くもお目にかかっていなかったもので、おいしくて妹と涙をこぼしながら味わった。

満州の冬は早い。あまり寒くないうちに避難民を錦州在住の日本人の家に分宿させることになり、私たち兄妹は、「五十鈴街」という錦州の郊外にあった、官舎の、梶原さんの家に割り当てられた。ところが偶然にも、梶原さんは私が小学校一年生のときに、承德の隣りに住んでおられた方だった。当時と同じように、シェパード犬を二頭飼っていた。私たちはまだ小さかったので、シェパード犬が怖くて近付くことをしなかったもので、あまり名前も知らなかったが、梶原さんは私たち兄妹のことをよく知っていた。子供さんのない方だったので、私たちの面倒を親身になってみて頂いた。奥様の手作りの綿入れの支那服のおかげで、私たちは酷寒の冬を何とか乗り切ることができた。

また、一年先輩で高林君という、承德で近所に住ん

でいた人にも、その街で出会った。彼は、満州電信電話株式会社の通信士の養成所を出ていて、戦時中は電報局や新聞社の通信士として活躍していた。沖繩の玉砕は、私が休学中に、彼の新聞社の通信室で偶然に入ってきた無線で知ったことだった。「君のお母さんに頼まれて、旅順の銀行に僕がお金を送ったんだが？」と、ソ連軍の侵攻が始まった直後のお母さんの行動について話してくれた。私たちが旅順をたつのが早かったのか、ソ連軍の侵攻による混乱で処理されなかったのか、どうなのかよく分からないが、私のところにはその送金通知は届かなかった。彼とは、一時一緒に豆腐売りをやったこともあった。城内の満人の豆腐屋から仕入れてきて、日本人の住んでいる街中で売るのが、最初は多少売れたが、そのうちにはほとんど売れなくなりやめてしまった。

蓄えを取り崩しながら食いつないでいた在留日本人の生活も、段々と厳しくなっていた。

#### 八 だまされた人々

そんなころ、私が病み上がりであることを、だれか

が日本人居留民会に申し出てくれて、使役などの労働は無理だということになり、五十鈴街の居留民会支部の世話で、支部の仕事をして働くことになった。本部署、在留邦人への連絡や、支部での雑役の手伝いなどをして、何がしかの給付にありつくことができた。居留民会支部では避難民の生活の糧として、男性には使役作業を、女性には縫製の仕事などを探してきて、希望者にあっせんしていた。そしてその報酬の一部を、乳飲み子を抱えていて働けない婦人や、体が悪くて働けない病人、年寄りのために分けてもらって、それを元にして食糧を買い、分配していた。しかし、報酬のほとんどがふすまや玉蜀黍トウモロコシなどの現物のたぐいだったから、どれほど役に立ったかは疑問だった。街頭では手巻きタバコなどを売って、食い扶持を得ている人もかなりいた。

そんな日常生活が続いていたある日、「錦州市の治安が悪いので、日本人の元警察官や、官吏だった人たちによって治安維持に当たってもらいたい。しかし、過去の日本の思考や手法のままでは困るので、こちら

で再教育する。ついては、希望者は指定する時間までに、薄い掛け布団一枚を携行して、あらかじめ指示する場所に集まること。報酬は支給する」という内容の通知が本部からきた。ソ連軍か、八路軍から出たものらしい。敗戦からすでに三カ月ぐらいたっていた。ほとんどの人は日常の生活に困窮をきたしていたから、これ幸いとばかりに壮年・中年の男性多数がこれに応募した。集まる日は好天気だったが、吐く息がすぐに真っ白になってしまうような寒い朝だった。朝日が昇りきったころ、街内のほぼ中央にある公園に集まり、みんな一様に薄い布団を巻いた物にひもを通して、背中からたすき状に背負って、整然と隊列を組んで出発して行った。ところがその数日後に、その人たち全員が貨物列車に乗せられて、ソ連領内に運ばれて行ったことを知った。貨車から飛び降りて、運良く逃げ帰ってきた人から実情を伝えられたのだった。飛び降りた人たちの大部分は、列車内からソ連兵によって自動小銃で撃たれて死んでしまったということだ。だれとだれが亡くなったのか、名前も分からないという。暗く

重たい空気が、居留民会の事務所の中を支配した。そして、このときを境にして、街中の日本人男性の数が極端に減ってしまった。

## 九 国府軍の進駐

国民政府軍が攻めて来るといううわさが広がり、市街戦でも始まるのかと心配したが、八路軍は一夜にして撤退し、朝になると影も形もなくなっていた。その引き際は見事なものだった。居留民会支部の隣にあったアパートは、八路軍の兵舎になっていたが、日中は移動するそぶりも見せなかった。代わって街の中には国府軍であふれたが、軍の規律は八路軍に及ぶべくもなかった。

五十鈴街の官舎と隣の妙高街の官舎は、周囲を鉄条網で囲ってあって、出入り口には守衛が常時五、六人いたはずだが、夜間当直などをしていると、どこから入って来るのか分からないが、国府軍の兵隊が女あさりにやって来た。武器は持っていないが、こん棒などを携えていて、それで脅していた。ほとほと手を焼いてしまった。居留民会支部のそばに、元花街出身の女

性たちに住んでもらって、「特攻隊」と称していたこともあった。

## 十 引揚げ事務

国府軍が入ってきて、「日本人居留民会」は、名称を「日僑善後連絡所」に改称させられた。五十鈴街と妙高街も、まとめて「徳街」となった。そして、「日本人を全員、日本に送還するから、名簿を作成し提出せよ」という指示がきた。今までも散々だまされていたから、半信半疑ではあったが、ひとまず名簿作成の作業に取り掛かることとなった。

「徳街の住人すべてについて、一家族ごとに同じものを五、六枚作る必要があった。謄写版などなかったから、指定された様式見本の下に、わら半紙を重ねて置いて、千枚通しで穴をあけて鉛筆と定規でけい線を引き用紙を作った。名簿も鉛筆を削りながら間違いないように、何回も確認しながら書いた。錦州中学の上級生だった人も数人、応援に来て、毎日夜遅くまで残業につぐ残業で作業を続けたが、名簿ができあがるまでには二カ月ぐらいいかかってしまった。

春も近くなり、公園の隅にある共同井戸の周りに凍り付いていた厚い氷も溶けて、柳の芽も膨らみ始めていた。日本に帰れることがほぼ確実になったので、多くの居留民の人々は明るさを取り戻していたが、私にとっては憂うつな日々だった。母がどこに居るのか分からなかったし、私自身は日本を知らないこともあって、不安な気持ちでいっぱい、日本に帰れるということが大きな喜びにはならなかった。本籍地を引揚げ先としたものの、何線の何駅で降りたらよいのかも分からぬ。このまま満州に残る方法はないものかと、時々自問自答をしていたが、その結末には必ず自分は一人ではない、妹がいるのだと思ひ直した。しかし、この無警察状態の中で、自分一人で妹を守っていく自信はなかった。結局、大勢に従って行くしかない結論を得ていた。

#### 十一 母の消息

五月とはいえ、満州の風はまだ冷たかったが、明日は引揚げ第一陣が出発するという日の夕方、仕事を終えて連絡所から帰る途中、公園を横切っていたら、

「藤原君！」と、見知らぬ人に呼び止められた。「はい、藤原ですが」と返事をしたところ、その人は突然に「君の家に拳銃があった？」と聞いてきた。「はい、父の形見のがありました」「弾もあつた？」なぜ、そんなことを聞くのだらうといぶかりながらも返事をした。「たんすの小引き出しの中にありました。九発入りの小箱でした」と答えた。「うん」と軽くうなずいてから、その人は、「これは、人から聞き伝えの話なのだが」と前置きして、「君のお母さんは、その拳銃で自決したそう。私は明日引き揚げるので今日が最後だと思つたので、伝えておく」と言うや否やきびすを返して、一度も振り返ることなく急ぎ足で通りの先に消えて行ってしまった。私はしばし呆然として、その人を追うことも、名前を聞くこともせず立っただけだった。「どうして？」という思いだけが、頭の中を駆け巡っていた。

#### 十二 はるかなる承徳

満州からの引揚げは、錦州市から真つ先に始まった。旅順から奉天へ、そして奉天から錦州へと逆行し

たかに見えた私の放浪の避難行は、結局は日本への一番近道になっていた。しかし、承德にはとうとう帰ることができなかった。鉄道輸送はソ連軍が押さえていて、ソ連国内にあらゆる戦利品を運んでいたのも、承德の便などはとてもではなくあるはずがなかった。

また、錦州と承德とは国府軍と八路军との異なる縄張りになっていた。私たち日僑善後連絡所の者たちは、錦州市居留者の最後に引き揚げることになった。

引揚船の入港する葫蘆島は、錦州からそんなに遠くないが、無蓋の貨車で運ばれたので、道中寒さに震えあがってしまった。葫蘆島では、倉庫のような建物の土間に、一晩皆で体を寄せ合って寝た。電灯も無く漆黒の闇だったから、暴徒が襲ってきはしないかと思うと、まだ不安がいっぱいだった。

翌日、米軍の上陸用舟艇が接岸して、乗船が始まった。船員は皆日本人で、清潔な身なりをしていたので、ようやく安心した。割り当てられた船室に落ち着いてから、妹と甲板に上がった。船はもう岸を離れていた。空は曇っていて山は見えず、ただ、だだっ広

い褐色の平地が、どこまでも広がっているのが目に入った。二人は、陸地が見えなくなるまで、はるかなる承德の空に手を合わせた。

### 十三 妹の死

引揚船は佐世保港に入った。私の帰郷先である長野県更級郡信田村の本籍地へは、行く先々で聞いたり尋ねたりして、ようやくたどり着くことができた。そして、妹は篠の井町の小宮山医院に住み込みで働くことになり、私は伯父の紹介で、群馬県高崎市の獣医師業を営む農家で働くこととなった。兄妹は離ればなれになったが、何とか元気で働いていた。

そんなとき昭和二十三年八月三十日、突然「レイコキトク」の電報を手にした。思いもしない事態であった。早く行かなければと焦ったが、当時は鉄道の便も少なかったし、もちろん自動車などは進駐軍でもなければ持っていない時代だったから、翌朝の一番列車まで待たねばならなかった。高崎から篠の井までならば、今なら新幹線とタクシーを乗り継げば一時間ほどで着くが、当時の交通事情では五、六時間ぐらいか

かった。それでも午前中には小宮山医院に着いたが、妹は伝染病の隔離病棟にいます。急いで行ってみたら、布団もないベッドのマットの上です。事に事切れていた。その姿は、ろう人形のように青白く静かに眠っていた。日本脳炎で昨日発病し、夜半に亡くなったとのことだった。部屋にはベッド以外は何もなくて、だれもいなかった。かわいそうで涙が流れ出て止まらなかった。「礼子！ ごめんね」と、小さな声でそつと語りかけながら、頭をなでてやることだけが、当時の私にできる精いっぱいだった。

この労苦記録を書くにあたって、妹からの古い手紙を読み返していたら、亡くなる十日前の昭和二十三年八月二十一日付の葉書が出てきた。当時、一度読んでしまい込んであったものだが、それが亡くなる十日前に書かれたものだったという事は、長い間気付かずにいた。そこには、次のようなことが書かれていた。

「引揚げ後、三回目のお盆でした。お母さんはどこかの地に眠っておられるのかしら。お母さんの命日である十五日に、井原さんに教えて頂いて、父がいます納

骨堂（長野善光寺忠霊殿の納骨堂のことで、母が父の遺骨をそこに納骨していた）にお参りに行きました。整然と鎮座した幾百幾千の遺骨、その中に父上もおはしますと思うと、嬉しいような、悲しいような気となり涙が伝わりました。

お兄様がこちらにお参りになられたら是非一緒にお参りし、父上の遺骨と面会して参りたいと思っております」（原文のまま）

しかし、私とその納骨堂の父の遺骨と対面したのには、それから二十三年も後の昭和四十六年九月のことだった。昭和四十年の税理士試験に合格して、翌年いわき市で税理士を開業して、それがようやく軌道に乗ってからのことである。それまでは、農家の作男、ベットショップの店員、警察犬協会の訓練士、社交ダンスの教師と職業と居住地を転々とし、しかも常に「他人の家のかまの飯」を食っている居候的な存在であったから、余裕など全くなかった。

#### 十四 承德の石

昭和五十四年九月、「熱河思い出の会」が企画した



「中国の旅」で承德へ行くことができた。早速、母の埋葬地を訪れようと、当時住んでいた「南営子ナンエイシ五条胡同ゴジョウワコト」に行ってみたが、その辺り一帯は高い塀に囲まれた工場になっていて、当時の人々はだれもそこには住んでいなかった。戦後三十四年もたったことであり、結局、その所在は分からなかった。致し方なく、以前住んでいた家の付近と思われる場所から「承德の石」を持ち帰って、仏壇に供えた。

昭和五十八年八月十一日、ささやかな我が家の墓を建立した。善光寺から分骨してもらってきた父の遺骨と、前述の承德の石と、そして既に土に返っていた妹の墓の土とを、一緒にそこに納めた。それが家族でたった一人生き残った、私の務めであるような気がして……！

## 私と満州

栃木県 中込 敏 郎

### 出生から幼少期

私は、大正十五（一九二六）年十月三十一日に山梨の農家の長男として生まれた。生家は祖父の代に分家して独立していて、父は小学校卒業後すぐに就農した。しかし、五反歩ほどの自作地に若干の借地がある小農の悲しさと、その経営の主体が養蚕業で農作業も季節的に限られるという事情もあって、私が物心ついたころの父は、冬期間はいわゆる甲州商人として主に関東・東北の農村地帯を回る反物行商などをして、生計を維持していたようであった。商才に長けていたのか、かなりの収入を得ていたようだった。

満州事変の終息による、昭和初期の経済不況や、農村恐慌からの脱却の一手段でもあった満蒙開拓事業が、昭和七（一九三二）年から国策として開始され